

記録

35ミリ

カラー／35分

日・英・仏・独・西・

伊・葡・タイ・アラビ

ア・インドネシア語版

■企画

MOA美術・文化財団

■製作

桜映画社

MOAプロダクション

■監修

元京都国立博物館館

長 林屋辰三郎

東京大学工学部教授

稲垣栄三

建築家・東京大学講

師 早川正夫

スタッフ

■製作

森山忠彦

村山英世

■脚本

村山正実

吉岡敏夫

■演出

村山正実

■照明

本橋俊男

長坂 潔

■編集

沼崎梅子

■音楽

池辺晋一郎

■解説

仲谷 昇

よみがえる光琳屋敷

文部省特選 優秀映画鑑賞会推薦 第2回文化庁芸術作品賞 第24回日本産業映画コンクール奨励賞 1986年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第4位

尾形光琳自筆の絵図面に基づいて、その晩年の住まいが熱海MOA美術館の庭内に復元された。映画は、光琳屋敷の建設の過程を記録すると共に、残された作品や画稿をたどりながら、独自の画境を開き、華麗な芸術を完成させていった光琳の創作の秘密を探っていく。



江戸元禄期を代表する画家、尾形光琳。光琳と尾形家に関する史料、「小西家文書」の中に晩年の住まいと思われる光琳自筆の間取り絵図が残されていた。屋敷は建坪80坪（京間）あまりの数寄屋造りの町屋で、屋敷内には16畳の絵所（画室）があった。光琳はここで代表作「紅白梅図屏風」を描いたのであろう。

京都の富裕な呉服商に生まれた光琳は、二代將軍の奥方やその娘東福門院御用の豪華な衣装を見慣れて育った。尾形家は、新風を興した光悦や宗達とも知遇があり、光琳の芸術活動に与えた影響は少なくない。晩年は恵まれなかったが、光琳の芸術は優雅で華やかで暗い影すらない。その作品は絵画だけでなく、陶芸、漆芸、染織といった幅広い域にまで及んでいる。

間取り絵図をもとに、光琳屋敷の復元が始まった。復元に先だって時代考証や材料探しなどが正確な再現をめざして行なわれた。

昭和60年12月、甦った光琳屋敷には光琳の好みが行き渡っている。間口7間半ほどで京都の町屋としては広い。それを利用して主屋の南に露地を作り、奥に3畳台目の茶室が設けてある。主屋にも随所に光琳の好みが見えていて、京の町屋の作法にのっとりながら意匠や材料の選択の工夫がこらされている。私たちはこの再現された光琳屋敷を通して、光琳の人となりと洗練された芸術、そして近世市民の豊かな生活文化を偲ぶことができる。